

藝園と草牧

第三卷・第二號

昭和二十九年二月一日(毎月一回)發行



雪印種苗株式會社
沼津市堀江一〇六六
雪印研究農場

雪印種苗株式會社

養蠶に桑園

養畜には草園

今までの畜産は草をわすれた畜産で、こういう畜産は發達しない、畜産の「畜」という字は、すべからく「蓄」と書くべきである。

日本では昔からさかんに養蚕が行われ桑作りが進んだ。桑園無くしては全く養蚕は成り立たない。昭和十年前後には桑園面積が五十九万町歩にも達し、山畑や河原に近い処までよく桑園として利用されている。それに比べると日本の養畜は草作りが併進せず、山野草と稲稈残滓等を利用して家畜を飼い、牧場や山野草は掠奪するばかりで培養することなく年々草生が衰退している。養畜では桑種の改良や桑産の向上が養種改良と畜産を促して世界的水準に達しているが、家畜は世界の良種を輸入して改良しているが草産はほとんど省みられず、畜産業はいつまで経つても世界的水準に到達し得ない状態にある。どうもわが国の畜産は草をわすれた畜産で、こういう畜産はいつまで経つても發達しない。畜産の畜はすべからく蓄と書き改むべきであろう。

この原因は穀実を目的とする米麦だけを作物と考え平坦地に一年作物のみの耕作に終始して、広大な地積を擁する山地、傾斜地、低湿地に多年生の良草を生産することを考えないこと、家畜の八割は米麦耕作の役畜として飼い、乳肉を目的とする家畜はわずかに二割に過ぎないことに由来する。また草園を作ることは粗放な農業と考える向が多いのは、草原や草地を未開地と考え、自然草生を掠奪することが草地の利用だと考えることに起因する。草園経営は決して粗放なものではなく、きわめて集約な農法で、桑園、果樹園、蔬菜園、花園の経営と同程度の集約性と園芸性を持つものである。

園芸というが果実蔬菜等の新鮮食品の生産を対象にして、果実蔬菜よりもさらに新鮮度を貴ばれる乳肉等の

高級食品を生産するには新鮮な草を必要とすることは当然であつて、草園作りも園芸に属すべき農業部門である。本誌の誌名が牧草と園芸と呼ばれていることも、牧草が園芸作物と近似しかつ相互関連性の深いことを物語つてゐる故ではなからうか。

桑から絹糸、草から乳肉

絹糸(蛋白)は桑葉が蚕体を経て生産されるように、乳肉(蛋白脂肪)は草が畜体を経て生産される。動物は植物の生成物を摂取してさらに高級な成分にするだけで、絹糸も乳肉も本源は桑と草とにあるのだから、桑園が絹糸生産を向上し、草園が乳肉生産を向上することは当然である。

日本は農地がせまく食糧生産にさえ不足がちなから、農耕地内に草園の大拡張をするようなことはできない。また国内の役畜(三〇〇〜四〇〇万頭)の一部を乳牛におきかえることはできても、現在の草産状況の下では二〇〜三〇万頭の乳牛くらいが関の山で、いつまでたつても役畜を凌駕する程には到達しない。しかし山野の自然草生地よりも広い程の草園ができ上り、草生を二〜四倍くらいに進めることは容易であり、ところによつては一〇〜二〇倍の草産力をあげ得る場所もでてくる。いまだにこれに完成することはできないが、草園の作り方を研究普及して、国策として強力に進めるならば、年々業績を積み将来に大きな光明を得て、農村青少年の夢のような希望が開け

日本国土の二〜三割を草園化し得るに到るであろう。そう

いう基礎を建設しながら養畜が發展すると、始めて堅実な畜産や酪農が發達し、乳牛も何百万頭かに増殖し乳業経営が合理化されて、安い乳や乳製品が、新鮮な園芸的食品として国内に展開し、外国乳製品と遜色ない価値や価格を持つようになるであろう。

草園の經營

草園の經營ではオランダのポルダー(埋立地)、デンマークの荒蕪地、スイスの山地、オーストラリアの乾燥地、ニューギニアの藪地畜地、アメリカの大平原、カナダの冷涼高地、アルゼンチンのパンパス等、なしたげた業績を検討すると、日本の土地と気象では大概の処で成功することが予想される。また西欧ばかりでなく東亜の大陸でもすでに目覚ましき業績がある。例えば山西から大同にかけて閩錫山の業績と思われる大海のごときルサン地帯があるように西欧でも東亜の大陸でも着々と国土計画的な基本農業政策が進められている。

飛躍の年

新日本再建初の午歳を迎え、今年こそ殻を破つて飛躍の緒に着かなければ、日本農業の将来に明るい見透しは樹たぬ。眼前の利益のみを追うような小策を排して大目標に向つて全力を傾倒し、日本農業の堅実な發展と世界農業のレベルへの大行進を始めた。このためにはあらゆる行きがかりや繩張り根性を打破して、真に日本国土の生産増強のために、国家も国民も相協力する強い輿論を喚起し、各分野でやりとげる気魄を醸成し、農民が尻をまくつて水田に飛込むような意欲を草産の面に顕現してほしい。

世界の大勢は食糧過剰の傾向にあるのに独り日本が不足になやむのは、農業政策が耕地偏重の殻にこだわつてゐるからである。世界はいまや食糧は量より質の問題に移つてゐる。良質な穀類蔬菜果実の生産を進めるとともに高級な動物蛋白、脂肪の生産を図るべく、草と家畜との農業推進を、時代が要望している。もはや口や文の時代ではない。寸土から実践すべき緊急の時代がきていることを痛感する。

(田垣恒雄)